
H.B.

天海雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H・B・

【Nコード】

N6437M

【作者名】

天海雨月

【あらすじ】

一応主人公扱いの吉田茂は今日も元気に高校に通っていました。しかし、海外の転校生が一時体験してから少しずつ彼の環境が変わっていく話です。どうかよろしくお願いします。チートはありません、異世界物語でもありませんが、SFであることは認めます。

プロローグ（前書き）

どうも新人です。天海雨月といます。ま、気が向いたら見て下さい。

プロローグ

プロローグ

この物語を語る前に二つ読者に伝えないといけない。そうでない
とこの文章読んでいて、「なんかわかんない」とか「何これ」とか
疑問に思ってしまうことだらけになってしまうからだ。

まず、一つ目はこの世界には二つの財団がある。表派閥と裏派閥
である。どちらも簡単に言い換えれば「表世界」と「裏世界」とい
う。表世界には三つの財団が存在する。石原財閥、石倉財閥、石井
財閥である。

石原財閥はIT専門、石倉財閥は文化専門、そして石井財閥は戦
闘機及び軍関係である。石井財団は自衛隊の武器を作っているの
であって、死の商人ではない。この三財団が日本の表社会を支えてい
る。どちらかが一方傾けば日本は崩壊するといわれている。

その下にも財閥があるがこの三財団が鍵を握っているのです、そこ
までは重要ではないだろう。この三財閥を表社会に住む人々はこう
呼ぶ「表世界秩序護衛三財団」略して「表三財団」と。世界各国で
有名であり、彼らを襲撃したら家族全員が今後の人生は奴隷扱いを
受けてしまうのだ。

裏世界にもそういった財団がある。最もそれらは、一々家ではある
が、同じように表三財団と同じような名前がある。「裏世界秩序攻
撃十八家」略して「裏十八家」。彼らに敵対するものは一族郎党抹
殺と言われている。それぞれが謎の武術を使い、日本を裏側から守
ってきたのである。名前は明るみにでていないのは、秘密だからで
あろう。

そして、二つ目はこの二つの表と裏世界を支配する財団がある。
その財団は決して口にしてはならず、裏世界ではタブーとされた。

日本を支配しているのは政府ではなく、その家族が支配しているのである。この財団は「大久保家」と呼ばれているのである。闇から生まれた家族は闇の中でしか生きていけない、その鉄則を破った二代目は追放となる。そして、三代目こそがこの物語の鍵を握る存在でもあるのだ。

プロローグ（後書き）

プロローグでした。基本的に三日に一度書くか、その時の気分次第で書きます。女性キャラクターは基本全員、ヒロイン扱いなのでよろしく願います。

くだらない日常（前書き）

はい、二話目です。高校の頃、こんな日常を過ごしたかったです。みなさんに楽しんで貰えたらいいと思っています。

くだらない日常

キンコーン、カーンコーン

始まりのベルがなり、今日もくだらない授業が始まる。総連第一高校はマンモス高校ではないが、それでも生徒の数は多い。東京都のお茶の水辺りにある雰囲気はごく普通であるが、実際は都内屈指の問題学校である。生徒が暴力を振るったり、体罰が絶えないとかそういうものではない、彼らの地域には警察がいない、マスコミが殺到しない実に穏やかな場所でもある。

そう、お茶の水から池袋までは石原財団の縄張りなのである。だからといって、犯罪が起こらないわけでもない。だが、事件の次の日にはその犯罪者は撃ち殺されて発見されているのだ。

石原家の縄張りとはもう一つ違う意味で怖い場所がある。それはのんばあの家といわれるマンション（？）のようなものがある。

そこに入れるものは人生に訳ありのある輩のみで、関係ない人々は例え赤ん坊でも、某国の大統領でも、動物でも、アイドルでも射殺される。警告が一度だけされ、それを無視するなら殺されてしまうのだ。

そう総連第一高校は石原家とのんばあの家を守られているのである。

「よし、みんな席に着いてもらおう」

リーダーらしき生徒が教壇に立って、生徒を見回す。顔は童顔、背は168センチぐらい、黒髪はムースで整えている。この生徒をどうやらみんな慕っているように思える。

「先生が来る前にさっさと委員長を決めよう」

「いや、お前やれよ」

一人の生徒がツッコむ。他の生徒もブーブーと文句を言いだす。

「何言っただよ。俺は企画員だ。委員長みたいな面倒臭いこと、神が土下座してもやらねえよ」

「じゃあ、誰がやるんだよ」

「ここは一つ、俺が推薦しようと思う。平寺でよくねえか」

すると、窓際にいる生徒が一人びくつとした。彼は自分のことだと分かり、少しだけ嫌な顔をする。

「平寺か、いいな。よし、平寺に決定」

みんな頷きながら、一人の生徒に押し付けた。リーダーらしき人物が窓際に生徒に確認を促した。

「おい、隠田。賛成だよな」

「うん、わかったよ」

震えながら、その少年を見た。彼はこれでこのクラスのイジメの標的にされたんだと理解した。

「それじゃ、平寺に決定」

ガラッとドアが開き、眼鏡を掛けたボサボサ頭の先生らしき人物が入ってきた。その先生はリーダーらしき生徒を見て、言った。

「何してんだ、吉田。そんなとこ突っ立つてよ」

「委員長を決めていました」

「そうか、それで誰になったんだ」

「平寺です」

「隠田の了解とったのか」

「はい」

「そうなのか、隠田」

「ええっと、はい、一応」

「そうか、じゃあ、みんなは隠田のことをよく聞くんのだぞ」

すると、吉田と呼ばれた生徒は先生を見ながら笑い出した。

「どうした、吉田。お前頭可笑しくなったか」

「いや、先生。そっちの平寺じゃないですよ」

「ん？どっちの平寺なんだ・・・ってちよつと待てこら。まさか、俺じゃないだろうな」

「名字がひらじと読むのは先生しかいないでしょ。平次先生」

平次先生はもっていた回覧板のような本を下に落として驚いている。

「なんで俺が委員長しなきゃいけないんだよ」

「だって、校則に先生がなっちゃいけないなんて、決まってないし。なあ、みんな」

他の生徒は笑いながら拍手をした。

「いや、俺は反対だ。断固反対だ」

「いや、先生。多数決で決まったのでよろしく」

「てめえ、企画員じゃなくて、学校のブラックリスト入りするぞ」

「もう入ってると思いますーす」

睨み合う二人と他の生徒が笑いながら、授業が潰れたことに感謝している。

「てめえ、吉田。お前は2年B組の悪魔だ。おい、誰かエクソシスト呼んでこい」

「先生、さっき隣のクラス行ったら、エクソシストどころか、地蔵もいませんでしたよ」

「何、みんな消えたのか。職員室にいたときはたしかにいたんだぞ」

「え、それじゃ、怪奇現象で俺たち全員死んで、異世界に行ったとか」

「あわてんな、あわてんなお前ら」

そう言いながら、窓から飛び降りようとする。生徒たちは必死に先生を押さえる。

「おい、ここ3階だぞ。落ちたら死ぬって」

「放せ、俺はこんなところで死にたくない」

キンコーン、カーンコーン

「えー、2年B組の平次先生、平次先生。至急校長室に来て下さい。繰り返します至急校長室に来て下さい」

「.....」

「.....」

「あ、そういえば今日、一限目のホームルーム終わってから体育館集合だった」

そしてこの日を境に少しずつではあるが、吉田と隠田の様子が変わっていった。

くだらない日常（後書き）

どうでしたか。ちなみに、平次先生のあだ名はボサボーサ、教頭はザ・シャドーマスター、校長は理事長の配下、理事長は学園の悪の支配者です。何故こういう名前になったのかは本編で話そうと思います。

今回は『謎の転校生』か『謎の転校生襲来』にしたいと思います。

謎の体験入学生（前書き）

ここから超人やら悪の組織やらが参戦する話です。

謎の体験入学生

「ちょっと平次先生、君、何故体育館に来なかった。今日朝礼があると今朝職員室で言ったよね」

「うつせえ、理事長の配下が（ボソ）」

「なんか言ったかね」

縮地でも使ったのか、さっきまで外を覗いていた校長が平次先生の目の前にいる。太っていて、禿げていて、全ての校長の駄目な部分を受け継いだ究極の校長だった。

生徒たちの間では「ハゲ」、「デブ」、「能無し」、「酢昆布より薄い髪の毛」など様々な名前で呼ばれていたが、2年B組が二つ名なんて付けたら他の教員が可哀想ということで普通の「理事長の配下」になった。その横に学園最強の教師が黙って状況を見ていた。彼の名前は明かされていないが、影が薄く、いつの間にか出現するため、二つ名が「ザ・シャドーマスター」になっている。いいのか、わるいのかさっぱりわからない。

「いいかね、今日体験入学生が入ってくるから朝礼で挨拶しようとしたら、なんかぼっかり空間があったのよ。で、よく見たら2年B組いないじゃん。ちょっと焦ったからね。体験入学生なんて『校長先生、あそこのクラスだけは不良が多いのですか。ちょっと不安です』とか言われて、理事長の耳に入ったらやばいなと思ったのよ。わかる？」

「そうですね」

「なんか適当だな。これからもう一度朝礼したら生徒たちが暴動起こすかもしれないから、今回来た体験入学生を君とこのクラスに特別に一人ずつ紹介するから、くれぐれも刺激しないように」

「そうですね」

「適当だな。それから体験入学生は三週間しかいないから、あまり

いじめないように」

「そうですね」

「・・・」

「そうですね」

「何も言つてないし」

「そうですね」

「なんか腹立つてきたな」

「そうですね」

「てめえ、『失神してもいいかも』のオーディエンスじゃないんだから、このボサボーサめ」

「ちよつ、何であんたみたいなやつに俺の二つ名呼ばれなきゃ、ならないんだ」

「うつせえ、お前なんてな」

争いながら校長がプロレスみたいにボサボーサの頭をくしゃくしゃにした。負け時とボサボーサが理事長の配下の腹を殴りつける。普通の学校には絶対ない光景だ。

そして、校長が体験入学生を中に入れた。五人の留学生が教壇の前に立っていた。右から赤、黄、青、黒、白だった。最後の二人は国籍がなんとなくわかったが、前の三人は国籍が全くわからなかった。一人だけ男で後はニューハーフなのか、女なのか、年増なのかわからなかった。

「いいか、お前ら、失礼な質問なしだからな」

「うーす」

「お前ら、校長に向ける態度じゃないよな」

「うーす」

「まあいい。ほれ、自己紹介しなさい。みんな静かに聞いてろよ」

「うーす」

「この教師、この生徒だな。なんか舐められてるみたいだ」

「うーす」
「・・・」

校長は辺りを睨みつけて、体験入学生に自己紹介を促した。

「私の名前はリリー・A・リフナーです。パリから来ました留学生です。日本語は向こうで一生懸命勉強しました。3年C組でお世話になります。つまりあなたたちの先輩です。てへ？」

「うーす」

「私の名前はジョージナ トンプソンです。アメリカから来ました留学生です。日本語は向こうで独学で習いました。1年D組でお世話になります。つまりあなたたちの後輩です。よろしく」

「うーす」

「私の名前はクリステイ ジェンクレイです。イギリスから来ました。日本語は母が日本人のため上手です。2年A組でお世話になります。つまりあなたたちの同級生です。よろしくね？」

「うーす」

「俺の名前はジョン・アクゼルだ。アメリカから来た。三週間後アメリカアマのボクシング大会がある。そのボクシングをするために日本では環境がいいと聞いて来た。ここのクラスだよろしくな！」

「おうっっ」

「私の名前はニルイ・J・バンブーチンという。ロシアから来た。3年D組にいる。よろしく」

「うーす」

「お前ら、ジョン以外無関心だな。ほら何か質問がある人」

「ジョンに質問します。もしかして、君のお父さん、シュルツ・アクゼル？」

「何故父を知っている。父はマイナーなほうだと思ったが」

「俺の父親が大ファンでな。家に大量のビデオがある」

「これはうれしい。俺の父が好きな生徒がいたなんて。おい、名前なんだ？」

「吉田茂だけど、みんなにはシゲって呼ばれている」

「よし、シゲ。三週間だけだがよろしくな」

「おう」

「他に質問は無さそうだな。よし、理事長の配下。とつと校長室に戻れ。これから授業だからな」

「なにその態度。お前給料減棒にすんぞ」

「理事長に言おうかな」

「嘘嘘だつて、何立場上的なのに脅されるなんて不公平だーい」

泣きながら理事長の配下は教室から出て行った。留学生はあきれてみていたが、2年B組の面々は存在事態忘れて授業を受けてようと準備をした。

そして、ジョンだけ残り、授業をした。学校が終わり、みんな帰って行った。ちょうど四時になると理事長室である会議をしていた影に隠れてほとんど顔が分からない、ただ何故か集まっていた。

「盗聴はしておらんな」

理事長が机の上で手を組みながら座っていた。周りには十八人ほどの人がいた。

「大丈夫ですよ。さつき調べたらなかったので」

「うむ、今回集まったのは他でもないあの体験入学生のことじゃ」

「さつさと殺せば良いのに」

女の声がする。

「そうもいかん。普通の体験入学生とはちょっと違う。どう思う、生徒会長殿」

「うん、確かに怪しいが、そう我々が思っているだけかもしれないよ。君の意見が聞きたいなH・B。」

眼鏡がキラリと光るが、それでも顔はわからない」

「H・B・なら信憑性があっていいんじゃないの」

さつきとは違った女の声がする。H・B・と呼ばれた者は声を出す。

「そうだな。この総連第一高校に入学した只の留学生だという判断をするのはおかしい。まず、俺たち、裏を調べにきたのが妥当だな。あとはのんばあの家を調べに来たのかもしれない。もしそれが本当なら、あいつらは『あの方たち』の居場所を調べようとしているのかもしれない」

「それだけは避けねばなるまい。しかし何故我々を今更調べようと思うのかの」

「さあな。CIA、FBI あるいは他の国にとって邪魔な組織だからじゃないか」

「でも外れていたらどうすんのよ」

「たぶんないな。ここの学校の位置わかるだろ。観光名所もない、とくに所でもない。あるのは石原財団の縄張りということだけだ。第二高校は縄張りの外だからな」

「H・B・すまんが、彼らのことを調べてくれないか。死体は隠田君に頼めばいいだろう」

「わかりました」

教室で見るような情けない感じが全くしない。彼からでるのは殺気だけだった。

「では、頼むぞ皆の衆。期限は一週間。それ以上経ってしまうと今度は例の会議があるのでな、頼むぞ」

「は」

ザンツと音が鳴って皆消えてしまった。

そして会議はお開きとなった。

謎の体験入学生（後書き）

体育の先生（一年） 二つ名 ムキムキマッチョ
保険の先生 二つ名 魅惑もクソもないおばさん
用務員のおじさん 二つ名 影の支配者
化学の先生 （二年）二つ名 白衣のムツリ
社会学の先生（三年） 二つ名 夢も希望もない先生
数学の先生（二年）二つ名 出来損ないのホムンクルス

ありえない戦い（前書き）

世の中には色々な武術が存在します。しかし、その武術をいつ使うのかがわかりません。喧嘩の時、夫婦喧嘩の時、殺しの時、さっぱりわかりません。でも今は銃を使ってるから物騒ではありますがね。

ありえない戦い

ガキイイイイン

「何だ。今の音は」

「リー確認しろ」

ドツク、ダツシュ、ダツ

「おい、構えろ。こいつら一般じゃねえ」

シュッパ

「なんだ、こいつ狐の面なんか被りやがつて」

「我狐家に伝わる拳法を見せてやろう。『狐拳』」

「『狐拳』だと!!!」

狐の面を被った者は手を狐のように丸め、男たちが構えていた銃を切り崩す。弾丸をもはじき返す。

「漫画よりもすげえよ。だが、そんなふざけた拳法じゃあ、俺の蠅螂拳には敵わな・・・イッブシ」

そう言った男が吹っ飛んだ。いつのまにか鬼の面を被った奴がその男を吹っ飛ばしていた。

「鬼頭め、邪魔するな」

「ふん、狐はさっさと狸と化かし合いでもしてな」

「呼んだか」

「すっこんでる狸め。ここは我ら狐の戦い、貴様らのような奴らにここを開け放してなるものか」

「よし、そこまで言うなら。誰が裏の中で一番決めようぞ。初代と二代目様の決定なんてふざけた奴だからの」

鬼拳

狐拳

狸脚

そこにはゲーム『ちよつともない暴れ馬、三国夢想の戦い』に出てきたキャラクター並みの衝撃波があたり一面に広がった。負傷した男たちはこの戦いを見ながら呟いた。

「兄貴、ずらかりましょう」

「ああ、そうだな」

「こんな結末ないよう、狸責任とりなさい」

「あんたが悪いのでしょう、狐」

「どっちも悪いんだよ、狸と狐」

「……お前ら、報酬なしな」

「勘弁して下さい、HB様——！！！！！！」

ありえない戦い（後書き）

家庭科の先生 二つ名 ゲロ吐き
水泳のコーチ 二つ名 カナツチ
陸上のコーチ 二つ名 鈍足
学校に住む犬 二つ名 野良犬
3年B組の先生 二つ名 銅八先生
生徒会長 二つ名 悪夢を生む化け物（茂が勝手に付けた名前）

登場人物（前書き）

ネタバレがあるので、知りたくない方はどうぞ読まないで結構です。

登場人物

よしだ しげる
吉田茂

血液型：A B型

星座：獅子座

好きな物：バナナクレープ

二つ名：学校の恥さらし

概要

学校創立以来屈指の悪魔。総連高校がここまで落ちたのも大半こいつのせい。生徒を煽り、教師に楯突くという教師にとっては天敵のような人物。出生が訳ありで今はのんばあの家に住む。

おんだ ひろし
隠田平寺

血液型：A型

星座：牡牛座

好きな物：激辛チャーハン

二つ名：影師

概要

学校創立以来屈指の影師。彼が作る影は生きているかのように動く。マイナーな特技なため、2年B組は気にしない。裏十八家の隠田家の一人。死体処理が得意である。戦闘音痴である。

H・B・

世界一の凄腕ハッカー。彼独自のホームページがあり、そこをクラッキングできたものには世界中の隠蔽された出来事が見れるということが言われている。ただし、三回ハッキングに失敗した場合、自分の国のあらゆる情報を自分のパソコンから横流しにされてしまう。能力者なのか宇宙人なのかは今だ不明。

登場人物（後書き）

SFとか書いたけど、SFじゃないじゃん。もう、これSFに戻せないよ。

駆け引き（前書き）

頭の悪い人といい人の見分け方。会話をよく聞きましょう。オタクとリア充の見分け方、見た目で分かります。ボク娘とスケバンの見分け方、木刀もっているかで分かります。痛い人と厨二病の見分け方、どちらも世間に目を逸らしています。

駆け引き

Side H・B

昨日の狐家、鬼家、狸家はどうかして欲しい。今回の体験入学生とは違う任務なのに失敗はないだろ。おかげでこちらとら残業で死んでるけどな。

今はそれどころじゃない。ここ数年、他の国から移住者が増え続けている。しかもそれがスパイだとすぐ分かってしまう。例えば老人でも気をつけなければ、足下につけ込まれる可能性だってある。この体験入学生が本当に自己紹介の国からきたのか確かめてやる。

俺が廊下を歩いていると向こうからリリー・A・リフナーが歩いてきた。少しカマを掛けてみるか。

「グッドモーニング」

「グッドモーニング」

「今日はお早い出勤ですね」

「あら、そんなに早いかしら。もう八時過ぎよ」

「僕にとっては早いけどね。ねえ、ロンドンに住んでいるの？」

「ちよつと勘弁してよ。イギリスと聞いたらロンドンに住んでいるなんて勝手に解釈しないでくれる。あたしはダブリンに住んでいるのよ」

「残念。ところでなんで僕らの学校に来ようとしたの？」

「え、そりゃ、他の学校には体験入学制度がなかったからね、ここにしたいの。それが何か」

「僕らの学校は体験入学生制度なんてないよ。それにあったとしたら夏休みの後くらいに設置するけどね」

この女、やはりスパイか。ダブリンはアイルランドの首都、イギリスではない。こいつは結構過激派のイギリス政府に所属しているな。しかもアイルランドを自分たちの国だと認識している。うちの学校には体験入学生制度がない。何故ならあっても無駄だと理事長が判断したからだ。この地域だけ外国人は禁止になっている。ならば体験入学生制度は外国人を受け入れてしまう制度になってしまうからだ。

「私が頼んだら快く引き受けてくれたわ」
『強引に』を省いているな。

「ねえ、リリーさんって何歳なの？見た目が20歳以上に見えてしまうけど」

「ちよつと、あたしは18歳よ」
18歳だと、それにしても香水の匂いがするな。この匂い・・・血の匂いがかすかにした。なるほど隠すためにつけているわけだ。

「ところで話が変わるけど、例えばリリーさんの友人が秘密を隠していたら、どうする？」

「そうね。秘密というものは隠しても結局はバレてしまう。ならば私個人の力で、私が信じる力で暴いてみせるわ」
「そうですか、それじゃあ」

俺はその場を離れた。そして角を曲がったときに急いで壁を叩き、隠し階段を開いた。この階段はある特定の人物にしか開かないように設定してある。この階段でもう一つの屋上へと進んだ。

さっきの言葉は We believe the power,
this power can be destroyed

ryt h i n g w i t h o u t o u r b e l i e v e s .
だろうな。ちつ、厄介だ。まさか、イギリス王族過激派がいるとは
これは他の奴らも調べないと危険だぜ。

そう思いながら、H・B・は服を着替えた。旧制服を脱ぎ捨て、
現制服を着て、髪をオールバックにしてそこから出た。

｝ s i d e H ・ B ・ o u t ｝

｝ s i d e L i l y ｝

昨日は大変だったわ。変なお面を被った奴らにあたしの部下がみ
んなやられちゃって、他のところに所属する奴らを皆殺しにしまし
ればならなかったなんて。しかもシャワーも入れないなんて、日本
に来たくなかったわ。良い歳こいてなんで高校生にならないといけ
ないのよ。あの校長に色気でしたら一発で引かなかったわ。ある意
味普通の校長ね。血の匂いがしないようにキツ目の香水を掛けてお
いたから大丈夫だと思うけど、大丈夫かしら。

向こうから男の子が話しかけてきたわ。なかなかいい体つきして
るわね。スカウトでもしようかしら。ま、日本人だからスカウトの
前に死んでるかな。

「グッドモーニング」

「グッドモーニング」

あら、日本人なのに英語がうまいこと。でもまだまだだね。

「今日はお早い出勤ですね」

「あら、そんなに早いかしら。もう八時過ぎよ」

日本人は働くことにしか脳がないと思ったけど違うのかしら。も
う八時よ、普通だったら出勤している時間なのに。

「僕にとっては早いけどね。ねえ、ロンドンに住んでいるの？」

ロンドンだと答えるべきだけど、ここはあえてイギリスの植民地であるアイルランドの首都を言うべきかしら。日本人は勤勉だけど、イギリスのことを何でも聞く犬だからね。

「ちょっと勘弁してよ。イギリスと聞いたらロンドンに住んでいるなんて勝手に解釈しないでくれる。あたしはダブリンに住んでいるのよ」

「残念。ところでなんで僕らの学校に来ようとしたの？」

この子、質問が多いわね。しかもあまり聞きたくないことばかり、勘が鋭いのかしら。

「え、そりゃ、他の学校には体験入学制度がなかったからね、ここにしたの。それが何か」

「僕らの学校は体験入学生制度なんてないよ。それにあったとしたら夏休みの後くらいに設置するけどね」

「私が頼んだら快く引き受けてくれたわ」

『強引に』だけだね。

「ねえ、リリーさんって何歳なの？見た目が20歳以上に見えてしまっけど」

「ちよつと、あたしは18歳よ」

本当は26歳よ。

「ところで話が変わるけど、例えばリリーさんの友人が秘密を隠していたら、どうする？」

「そうね。秘密というものは隠しても結局はバレてしまう。ならば私個人の力で、私が信じる力で暴いてみせるわ」

「そうですか、それじゃあ」

彼は去って行ったわ。もうなんなのこの質問攻め。そういえばあんな子、この学校にいたかしら。ま、いいわ。どうせ三週間したらここから消えるもの。あんまり覚えないうが、いいからね。

side out

このカマの掛け合いによってH・Bが彼らに攻撃を仕掛けたことは言うまでもない。

駆け引き（後書き）

昨日コンビニ行ったら「当店は十八歳以下の方にはこの商品を売ることができません」って言われた。ビーフジャーキー買おうとしただけなのに？

お便り待ってます。

決闘（前書き）

今日書いたあっち向いてホイは小学校の頃やって、怒られた記憶があります。でも楽しいから別にいいでしょう。

決闘

「よし、お前ら準備はできたか？」

「え、何の準備ですかボサボーサ（笑）」

「おい、今の誰だ、（笑）なんてふざけた名称つけたのは」

「そんなのどうでもいいじゃないですか、ボサボーサ（アホ）」

「茂、貴様か。だんだんと俺を馬鹿にしていないか」

「そんなわけですよ（本当に馬鹿を超えて、キング・オブ・馬鹿だよな）」

「よし、てめえ、決闘だーーーーー」

「受けてたつ」

普段とあまり変わらない2年B組で決闘が始まる。元々はテスト準備だったが、茂がテスト準備をしてこなかったためにこうなった。ジヨンは何が起きているかさっぱりわからない様子で隠田に語りかけた。

「なあ、決闘って何よ」

「あっち向いてホイ〜死と隣り合わせの戦闘〜だけど？」

「だから何それ？」

「お互いじゃんけんして、勝った方が相手に右、左、下、上のどれかを一つ選んで、相手を殴るのさ」

「え？俺もやりてえな、ようはじゃんけんて勝てば相手を吹っ飛ばせるというわけだろ」

「ま、そうだけど。茂には勝てないよ」

「なんでだ」

「見てれば分かる」

「「じゃんけんーーぼん」」

ボサボーサはチョキを出し、茂はグーをだしていた。そのままアップアを決めて、ボサボーサは上に吹っ飛ぶ。漫画「明後日のジョーイ」のように口から血を吐いて、

「やるな。ジョーイ」

「そうでもないさ。グレイ」

という風に会話しているが、ボサボーサは一回も勝てない。十回ずつと茂が勝利している。

「どうなつてんだ、これ。まさか先生ってじゃんけんに弱いのか」
ジョンが不思議に思つて質問した。

「まさか、違うよ。よく見て、茂の動き」

「ん？あれは」

ボサボーサと茂が拳を出すとき、微妙に茂の方が遅いのである。

「後だしかな？」

「そう。他の人にはバレない高等技術。ふ、僕も真似しようと思つたけどできなかったよ」

「すげー卑怯だな茂って」

「今更気付いたの？」

「今更だな」

そしてボサボーサは倒れて茂はキング・オブ・卑怯になった。

決闘（後書き）

今回、話の流れにまったく関係ない話をいれましたが、どうでしょうか。

二つ名が厨二病臭い？ ないない、そんなわけない。そんなわけないでしょう。アハハハハ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437m/>

H.B.

2010年12月11日14時20分発行